

Management Club Report

Jun.2006/Vol.42

Monthly Opinion ローマは一日にしてならず

“常識人”になった歯科医師

現在朝日大学副学長の赤石健司氏は、私がかつて勤務した会社での上司に当る方ですが、歯科界がバブル経済に呑み込まれていこうとする20年ほど前に、独自の『可処分所得論』で歯科医院経営の健全運営を訴え続けました。

当時は私も「カバン持ち」として同行して歩いたものですが、歯科医師会を中心とした講演活動は全国に及び、クインテッセンス出版より上梓された『歯科医院経営入門』は、高い支持を得ていたことが思い出されます。

その赤石氏がバブル崩壊後の経営建て直し期に好んで取り上げた講演テーマは『歯科医院経営者たる歯科医師が備うべき常識』というものでした。専門技術者として、どうしても限定された視点での考え方に陥りがちであったり、社会常識の不足から思わぬ苦境に立たされたりしやすかった歯科医師を覚醒させる上で大きなインパクトがあり、そのおかげで破綻寸前から救われた歯科医院経営者は少なくなかったと思います。

一人前の歯科医師をつかまえてあえて『常識』という言葉を使った背景は、その当時はあまりにも『非常識経営者』が数多く蔓延っていたことにあります。具体例を挙げるとキリがありませんが、次のような人たちです。

医院のお金と自分のお金の区別がつかない人 多額な借金を短期調達する人、 減価償却費を食べてしまっている人、 自転車操業的に次々と分院展開する人、 資金調達のめどが立たないのに内装工事に入ってしまう人、 すぐにリースでモノを「購入」する人、 サイドビジネスを始める人、 株式投資にのめり込む人、 高級車を何台も購入する人、 毎週高級クラブに出没する人、 高級クラブの女性に“イレコム”人、 技工所や材料商の担当者を自分の小間使いくらいに思っている人、 エト・セトラ、エト・セトラ・・・
